21

『素問攷注』に引用される『解体発蒙』についての一考察

竹内　尚

森立之（一八〇七～一八八五、字は立夫、号は枳園）の大著『素問攷注』（二十巻、一八六四年稿）は、中国伝統医学の聖典『黄帝内経素問』の注解書であり、幕末考証学の精華として高い評価を受けている。本書は書中において極めて多くの文献を参照しているが、その中には僅かながらも蘭学書が含まれており、また解剖学的な記載も散見されることなどから、立之が蘭学への関心を少なからず持っていたということを伺い知ることが出来る。本発表は『素問攷注』中に散見される蘭学的記載に着目し、そのなかでも立之が比較的多く利用していた『解体発蒙』について考察するものである。

『解体発蒙』（四巻附録一巻、一八一三年刊）は、三谷公器（一七七五～一八二三、名は樸、字は公器、号は笙洲）の著した解剖書であり、漢蘭折衷派として知られる三谷の独特の見解と、書中に見られる多色刷の蔵府図が大きな特徴となっている。『素問攷注』において『解体発蒙』の説は都合六回引用されており、「三谷樸『解体発蒙』巻四曰、心蔵神、脳蔵精、心主発出神気、脳主蔵入精気。譬欲視聴之者即神之出也。既得視聴之者即精之入也。又曰、昼覚時費神於外、発以為事業。夜寐時畜精于内、収以為逞寤時之用也」（五蔵別論第十一）の様に書名または三谷の名を挙げ論じているものが多い。しかし「或曰、肝金秋肺春木、大非」（霊蘭秘典論第八）の様に説のみを挙げているものもあり、今後精査することで他の用例が見つかる可能性も有ると思われる。

『素問攷注』に引用される『解体発蒙』は、前述の三谷の説について論じているものばかりでなく、もう一つの形式がある。立之約之の案語として記されている、蔵府の位置形状についての解剖学的な記載はしばしば見られるが、それらの多くは『解体発蒙』の蔵府の記載と極めて類似しており、その引用であると思われる。以下に両書の記載を列挙し比較してみる。

「案、小心、『太素』作志心。即謂命門。命門者小腎也。在大腎内傍、左右各一。其形正円而扁、大如碁子、形亦相似。其質似肉非肉、似脂非脂、即腘也。其色黄褐有斑紋。其中空虚、有少許淡黒鹹汁」（『素問攷注』刺禁論第五十二）

「左右二枚アリテ相対シ、大腎二枚ノ内側上辺ニ在リ、即チ其支脈ヨリ、又小支脈ヲ分テ相連レリ。其大サ碁子ノ如ク形モ亦相似タリ。其質ハ肉ニ似テ肉ニ非ス、脂ニ似テ脂ニ非ズ、即チ腘ノ扁キ者ナリ。其色ハ黄褐ニシテ斑紋アリ。其内ハ空罅アリテ、少許ノ淡黒鹹汁ヲ貯蓄セリ」（『解体発蒙』巻二腎）

案。募即幕之俗字。…其全形如荷葉。前附髀骬。連肋骨。後著季肋。其末作両叉。下属腰脊椎骨。前高而昂。後漸低。上載心肺二蔵。而下横覆肝脾腎三蔵。…。（『素問攷注』瘧論第三十五）

其全形差円ニシテ荷葉ヲ覆ガ如ク、前ハ髀骬ニ著キ肋骨ニ依リ、後ハ季肋ニ附キ其末ハ両叉シテ下リテ腰脊椎骨ニ属セリ。是ヲ以テ前ハ自カラ昂ク後ハ漸ニ低シ。即チ心肺ノ下ニシテ肝脾胃腎ノ上ニ横布セリ。（『解体発蒙』巻一隔膜）

『素問攷注』の記載は、『解体発蒙』の仮名交じり文を漢文へ変え、要点を記しているものであると言える。このような『解体発蒙』に拠る解剖学的記載はこの他にも数例見ることができる。そのいずれにおいても出典は明らかにされておらず、その真意は定かではない。

以上の様に『素問攷注』における蔵府の位置形状の記載に用いられた『解体発蒙』は、森立之の最も重視していた解剖書であったと言えるであろう。

（日本鍼灸研究会）